

迷子の私に……

やわらか戦艦

## 【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

## 【あらすじ】

これは、自分に自身を取り巻く全てに失望する中で、捻くれた孤独で哀しい英雄に救われたお姫様の物語。

※ボカロの曲を幾つか聞いてたら、この作品を思いつき書いてしまいました。圧倒的な葉山アンチなのに葉山の身内設定のオリ主モノです。

# 目次

|                         |  |    |
|-------------------------|--|----|
| やはり私と彼女は相容れない。          |  | 1  |
| 私は相愛ならず彼女と対立する          |  | 11 |
| 私は彼を認めない                |  | 21 |
| 私は彼女を少しは認めてあげようと思<br>う。 |  | 27 |



# やはり私と彼女は相容れない。

私は生まれた街が嫌いだった

退屈な日々が嫌いだった

壊れて止まった時計の針に、気付かない人達が嫌いだった。

上辺の言葉や誤魔化しの嘘が嫌いだった

だけどその奥で醜くとぐろを巻いた、本音はもつと嫌いだった。

でも……そんな風にしてすべてを呪っていた、自分が何より嫌いだった

だから、憎まれるなら愛さない

騙されるなら信じない

笑われるなら伝えない

見失うなら探さない

そんな風に自分を偽って、自分を騙すルールと言う鎖をかけた。

それが嘗ての私、葉山 雛だ。

そして現在、職員室に私は目が特徴的な男性である私の大切な人。比企谷八幡さんと

一緒に来っていた。

「よく来たな比企谷……」

平塚先生はそう言うのと、私に気付いたのか怪訝そうに視線を向ける。

「それで……何で一年の葉山も来ている？ 私は比企谷だけを呼んだのだが……」

「八幡は私の彼氏だからです」

私はそう言うのと、ドヤ顔で平塚先生にVサインをする。

「ほう……それは彼氏がいない私に対するあてつけか？」

平塚先生は額に青筋をたててそう言った。どうやら地雷を踏んだようだ。

「宜しければこちらで婚活のサポートを……」

「よし今度ラーメン一杯奢ってやろう」

いきなり態度が変わりましたよこの人……どれだけ結婚したいんですか……可哀想だから誰か貰って上げて下さい。

「それで君は、彼女がいながらこんな巫山戯た作文を書いた訳か……」

平塚先生はそう言うのと彼が提出した作文を読み上げ初める。

◇◇◇

青春とは建前であり、言い訳である。

青春を謳歌せし者たちは所詮、綺麗事だけの偽善者であり利己主義な奴らだ。

彼らはどんな悪意を持った行為や言動だろうと、青春の二文字で片付け正当化してし

まえる。

彼らには虚偽も暗躍も罪業も後悔さえも、青春と言う遊戯でしかないのだ。

仮に後悔することが青春であるのなら、青春と言う遊戯の玩具として犠牲になった人間もまた、青春の中心で満喫出来ないのは間違つてないだろうか。

しかし、彼らはそんな事実を肯定しないだろう。

彼らは所詮、利己主義の集まりであり青春はそんな彼らのご都合主義でしかないからだ。

ならそれは欺瞞だろう。

ならばそんな言い訳であり建前でしかない青春などいらぬ。

そんな言い訳や建前でしかない人生に意味などないからだ。

結論を言おう。

そんな虚偽に溢れた人生を桜花する位なら、たった一人の大切な存在である雛と過ごしたい。

◇◇◇

平塚先生が読み上げた後、私は顔を赤くして俯いてしまう。

「そんな……大切な存在何て……嬉しすぎて、ますます好きになっちゃいますよ」

「いや……まあ……あれだ。1年間を振り返って結局はお前と過ごしてる時間が小町の

次に気楽で良かった的な……」

「ふふっ八幡さんは相変わらず素直じゃないですね」

「ほっとけ！」

「八幡さん……」

「雛……」

そして私と比企谷さんはそう言うで見つめ合います。

「君達、そう言うのは私の前では無く、他所でやって貰え無いか？ それともやはり嫌がらせか？ 当て付けなのか？」

私達ははっとして振り向くと明らかに青筋を立てている先生がそこにいました。

「あっいいえそのつもりでは……」

「もういい……ぐすっ……どうせ私何て……」

平塚先生は半泣き状態でそう言うところからつく足取りで立ち上がります。

「とにかく2人とも君達は私の心を傷つけたっ！ よって君達には奉仕活動を命じる！」

わあーなんて理不尽で横暴……何時もなら断りたい所ですがこうも半泣き状態だと罪悪感が……本当に誰か貰ってあげて下さいよ切実に……

そして私達は泣きながら歩く平塚先生の後を気不味げについて行くでした。



「着いたぞ」

そしてしばらくして私達は、プレートには何も書かれてない、何の変哲も無い教室にたどり着く。

私達はこれから何をされるのか疑問に思う中、平塚先生はからりと戸を開けました。教室のなかは端に机や椅子が積み上げられている。倉庫として使われているごく普通の空き教室見たいな場所でした。

ですがそんな教室の中に一人座っている、長い黒髪の十人中十人が見惚れそうな容姿をした綺麗な女性の存在が、その景色をまるで一枚の絵画のように感じさせていました。

女性の私でも癪ではありませんが、不覚にも見とれてしまいました。

そんな彼女は私達に気付くと、読んでいた本に葉を挟んで顔を上げます。

「平塚先生。入る時にはノックを、とお願ひしたはずですが？」

彼女がそう言っている間に。私ははっとして比企谷さんの方を見ます。

比企谷さんの方もどうやら見とれていたようでした。

後でいっぱい甘えてやりますから、覚悟して下さいね。

「ノックをしても、君は返事をした事が無いじゃないか？」

「返事をする間もなく、先生が入って来るんです」

彼女は平塚先生の言葉に不満げな視線を送ると、私達の方に気付いたのか視線をうつします。

「それで何で葉山さんがいるのかしら？ 後、そのノブオーとした人は？」

私はこの人を知っている。いや正確には彼女は私の親戚とも言える人物だ。

国際教養科2年J組、雪ノ下雪乃。

嘗て私が彼女ならと希望を抱きそして失望した女性。私の一番嫌いなあの人が絶賛片思い中で、そしてあの人の次に嫌いな人だ。

まあそれを言ってしまうと、八幡が心を許せる人以外は基本的にきらいですが……あれ？ それって殆どの人が嫌いにならない？ やっぱり人何てろくでも無いですね。

「彼は比企谷。葉山と同じく入部希望者だ」

はっ！ 今この人何て言いましたか？ 私としては聞き捨てならないのですが？

「ちよつと待って下さい……そんな話一言も聞いていないのですが？」

私は平塚先生をそう睨みつけると、平塚先生は平然とした態度で口を開きました。

「私の前でイチャついて良く言うな……君達にはペナルティとしてここでの部活動を命じる。異論反論講義質問口答えは認め無いからな」

何たる横暴！ これを暴君と言わざるして何になる。てか先程の事は未だに根に持ってるんですね……私達が悪かったです申し訳ありません。

「とにかく彼女はともかくとして、彼は見れば分かると思うがなかなか根性が腐っている。彼女と付き合っているにも関わらずだよって雪ノ下には彼の更生を依頼したい」

「それなら、先生が殴るなり蹴るなりして躰れば良いと思いますが」

「私もできるならそうしたいが、最近は肉体への暴力は色々と問題視されるからな」

私の目の前で何か比企谷さんをめぐる物騒な話が繰り広げられる。それより精神的暴力はどうなんですか？

「お断りします。その男の腐った目を見てると身の危険を感じますので」

雪ノ下さんは乱れても無い襟元を掻き合わせるようにして比企谷さんを睨みつける。

いやいや雪乃さんは男子が見たいほど無いでしょう、私とたいして変わらない位なのに……あつ言つて悲しくなりました……

「安心したまえ、この男はリスクリターンの計算と自己保身は小悪党並になかなかのものだ。恋人がいるそばで、手などだす奴ではないと私が保証しよう」

その恋人がいるそばで堂々と小悪党とかよく言いますよね……てかりスるか褒めるかどちらかにして欲しいです。いやむしろ恋人の私からすれば褒めて欲しいですね……

「小悪党……。なるほど……」

しかも納得しちゃうれましたよ、これは恋人としては素直に喜べるない……雛的にポ

イント低いです。

「まあ比企谷さんのそばにただで私の好感度は常に上がりまくりですが……」

「まあ、先生からの依頼ですから無碍にできませんので……承るとしましょう」

雪ノ下さんは明らかにうんざりしたような顔でそう答えました。

「そうか。それなら、後の事は頼んだぞ」

先生は雪ノ下さんのその返事を聞いて満足げに微笑むと、そう言つてささつと帰つて行きました。

取り残された私達、物凄く気まずいです。

時計の音が響く中、比企谷さんの方を見ると比企谷さんの目がより濁つてました。恐らく過去のトラウマでも思い出してるんでしょうね。

私はそんな比企谷さんの袖を軽く摘んだ後、雪ノ下さんに向き合います。

雪ノ下さんもそんな私を睨みつけて来ましたが、私は目をそらさず口を開きます。

「懐かしいですね……小学校以来でしょうか？」

「ええそうね……平塚先生の話からしてその男と付き合っているらしいわね。私はあなたが何処の誰と付き合つていようと、気にしないけど脅されてるのなら私にも迷惑がかかるから出来れば正直に告白して貰いたいけど」

私はそんな事を口走る彼女によりいつそう怒りを覚える。

これだから私は彼女が嫌いなのだ。

自分の独自の判断で相手を知ろうともせず、に決め付け自身を正当化する。

それが性善説でも唱える私の一番嫌いなあの人と真逆の性悪説であっても、結局彼女はあの人と変わらないのだ。

「残念ながら私は自分の意思で比企谷さんと付き合っています。それに私は葉山を捨てました。ここにいるのは葉山家の雛では無く雛と言う1個人の女です」

私がそう言うと、雪ノ下さんは眉を僅かにピクツとしかめる。

「どう言う事かしら?」

「文字通りの意味ですよ。ですがもし理由を訪ねての事でしたら、私とその理由を語った所で信じやしないでしょうけどね」

そして私と雪ノ下さんはお互いに睨み合う。多分アニメとかなら、メンチの切り合いで火花が出てる事だろう。

だがそんな空気に耐えかねた比企谷さんは口を開く。

「あゝその何だ……」

「比企谷さん(君)は黙ってて下さい!(くれないかしら?)」

「はい……すみません」

そして私と雪ノ下さんの睨み合いが再開される。

そしてそんな私と雪ノ下さんのにらみ合いから、雪ノ下さんがついに口を開き初めた時、ドアを荒々しく引く無遠慮な音が室内に響き渡る。

「雪ノ下。邪魔するぞ」

「ノックを……」

「悪い悪い。まあ様子を見に來ただけだから気にせず続けてくれたまえ」

平塚先生はそう言うが、流石に今の現状はすっかり拍子抜けしてしてもはや喧嘩する気も起きない状態だ。

先程の続きはもはや無理と言えるだろう。

平塚先生は壁に寄りかかり私と雪ノ下さんを交互に見る。

「仲が良さそうだなによりだ」

先生は満足気にそう言いました、何処を見たらそう思えるのでしょうか？

その後は雪ノ下さんと再び言い争いが勃発し、何故か平塚先生が部活動を通じて勝負する事を提案、雪ノ下さんはその案を拒否しますが先生の安い挑発にのり、その日はおひらきとなりました。

# 私は相変わらず彼女と対立する

そんな私の鎖を解いたのは

差し伸べた手の先にいたのは

あなたでした

あなた何です

誰にも見つけられ無かった迷子の私を

見つけて

連れ出して

名前を読んでくれた

それが私の……

「平塚先生、何やってるんですか？」

私は恋人の肘関節を極めている人物をジト目で睨みつける。

「んっあぁっいつが部活に行こうとせず、そのまま帰ろうとするからな」

平塚先生は平然とそう言う、そして関節を極められてる比企谷さんは、先生の胸にある二つのそれに当たってる事もあり満更でも無さそうな顔に思わず先生のそれに殺意

が湧いた。

思わずそれを驚掴んで揉みしだきたい衝動にかられたが、この人の余りのジャイアニズムに、彼氏が出来ない理由が少し分かったような気がして、何か先生が可哀想な人に見えてしまったので見逃してやるとしよう。

まあこれが友人のお団子頭のあの子とかあざとい同級生のあの子なら、容赦はしませんでした。

「そう言えば君にも聞いて見ようと思っていたのだが、君に取って雪ノ下雪乃はどう映る？」

「急に何ですか？ まあ孤高で救いようの無い哀れな人でしょうか？」

私は笑顔で吐き捨てるようにそう答えると、平塚先生は優しげで何処か悲しげな目で私を見る。

「そうか……私は彼女は彼女なりに苦労や悩みを抱えてると思うのだがな」

私は先生のその言葉を無視する。

実際問題、彼女がいくら苦労や悩みを抱えてようと私や比企谷さんには関係ないのだから。

そして私と比企谷さんは特別棟の部室についた。

本音を言うと私も比企谷さんと一緒にポイコットしたいのですが、恋人の比企谷さん



が強制連行されている以上私も行かざるをえない訳で……くっ人質とは卑怯です。

特別棟の一角はとて静かで、何故か気温が下がっている気がした。

他にも部活は活動してらるだろうにも関わらず、ここはやけに静かでした。

それが彼女によるものか立地条件かはわかりませんが。

私は扉を開ける為に手を掛けます。

正直乗り気はしないしむしろ入りたくは無いのですが、比企谷さんとは出来るだけ一緒にいたい事もあり、ひとまず深く息を吸い吐き出すとそのまま扉を開きました。

「……こんにちは雪ノ下さん出来れば会いたくはありませんでしたが」

私は扉を開けると笑顔で彼女にそう言う。

「ええこんにちは葉山さん私はもう来ないのかと思ったわ」

そして私と彼女は火花を散らして睨み合う。

「……はあ雛も雪ノ下もあれか？ 会えば喧嘩しないと気が済まないのか？」

「八幡さんそれは心外です。私としては、嫌いな人といちいち顔合わせがしたく無いだけですよ」

「あら……比企谷君もいたのね。余りにも存在感が無いから気付かなかったわ」

雪ノ下さんは皮肉を八幡さんに言う、何でこの人はこうも挑発的なんですよ……だから私は彼女が嫌いなのです。

「あれだけ言われたら普通は来ないと思うけど……マゾヒスト？」

「ちげえよ……」

「じゃあストーカー？」

「それも違う。ねえ何でお前に好意抱いてる前提で話してるの？」

「違うの？」

流石のこの自信過剰ぶりに私は先程までの怒りも分散してしまうほどに呆れてしま  
う。

そしてとうの本人は小首を捻ってきよとんとしてますし、呆れてものも言えません。

「ちげえよ！ その自信過剰ぶりには俺も引くぞ」

「そう、てつきり私の事が好きなのかと思っただわ」

彼女は平然とした態度でそうさりりと言う。

恋人のそばでよく言いますね……まあ確かに彼女持ちの男子も雪ノ下さんに好意を  
向けてた事がありますから何も言いませんが……

「まあ雪ノ下さんは昔から、女子に敵を作る位モテてましたからね……」

「ええそうよ……私昔から可愛かったから、近づいてくる男子はたいはい好意を寄せて  
来たの」

「だけど小学校高学年位かしら……」

まあそこからは小学校での事をダムが決壊したかのように雪ノ下さんは吐き出ししました。

「だけど私は同情などしない。」

「そうですね雪ノ下さん、でもそれだけじゃあ無いでしょう」

「あら？　何が言いたいのかしら」

「別に。ただ私などの女性を拒絶しといてよく言いますねと、思っただけです」

雪ノ下さんが私を冷ややかな目で睨む中、私は満面の笑顔でそう言う。

「それはあなたが私と彼の仲を取り繕うと画策したからでしょう」

「誰が画策したのでしょうか？　第一私を存在しない者として扱う家に誰が義理立てすると？　被害妄想もいい加減にして欲しいですね」

私は彼女を睨みつけながらそう言う。彼女は私に驚いたように目を見開いた。

「……っ！　なら何故」

「言った所で当時のあなたは信じましたか？」

そう当時の彼女に言った所で、私の事情など信じる訳が無いのだ。

私の家、葉山家で私は両親に存在しない者として扱われた。

何故か？　答えは単純だ葉山家が求めているのは雪ノ下家と繋がりを深く出来る男子

であり、雪ノ下家との繋がりを薄める可能性のある女子は、望ましく無かったからだ。

だがそれでも私は葉山家の娘だ。だから人前では葉山家に汚点にならないように振る舞う事を強要された。

それは私に取って苦痛だった。

存在を否定され自由すら束縛されるのだ、苦痛以外の何になる。

そしてあの人は両親に甘やかされ、その事を未だに知らないし、言った所で信じもしないだろう。

つまり当時もそれは変わりはしない。

さらに私を見る女子はみんなあの人が目当てだったり、男子も私の外見しか見ないしまつ。

だからこそ私は学校内で複数の自分を作り出し、複数のグループの取り巻きに紛れ込む、何処にでもいて何処にもいない私を作り出した。

その事で悲鳴をあげる私の心から目を逸らしながら。

だからこそ、当時の私は雪ノ下雪乃に憧れたのだ。

そして彼女がイジメを受ける中、私は彼女の味方でいようと彼女を守る為に色々と画策した。

彼女なら葉山家の私でなく、本当の私を見てくれるかもしれないと思ったから。

『あなたは私と彼の仲を仲裁が目的なのでしょう、残念だけれども私はそんな考えで接

触されるのは嫌、だから私はあなたは嫌い、私にもう関わらないで」

そして彼女が私に告げたその言葉は私に失望と落胆を与えるのに充分だった。

なんの事はない、彼女の目にも私は見えていなかったのだ。

単に私が彼女ならと勝手に勘違いして勝手に期待してしまっただけの事だ。

それ以来私は、誰も信じず無関心に何処にでもいて何処にでもない私として振る舞い続けている。

今でこそ八幡さんにあつてその在り方は多少変わりはしたが、それでも未だにあの人のグループ以外では何処にでもいて何処にもいない私として振舞っている。

まあ中学のような事にならない為に、弱みなどを握つていざと言う時に備えて地盤を固めつつではあります……

そしてその日はお互いに何も言わず沈黙の時間が流れる中、私達は解散したのだつた。

「なあ雛……」

その夜、八幡さんの家で皿を洗っている中、比企谷さんが私に話しかけて来ました。

何で八幡さんの家で皿を洗っているのかと言いますと、私が八幡さんの家で居候しているからです。

私は葉山家に愛想を尽かし出て行きました。

まあ小町さんの事例を見て、私も確かめたくなくなったのが理由ですが……

結果は未だにあの人は私を探す事無く、今もみんなのあの人だ。

その事について落胆と失望は隠せないが、今は比企谷さんが私を見てくれる。

それに私も八幡さんと約束したから。

「なあ雛……」

「どうしましたか？」

「俺はお前とあいつの間で何があったかは知らないし知る気もない」

比企谷さんはそう切り出すと頭をかく。その姿がますます愛しく感じられる。

「だけどなたまには俺にも頼って欲しい、お前は何時も何かしら一人で抱え込むからな」

そう言うのはずるいと思う、だが同時に嬉しくもある。

「……それは八幡さんも同じでしょう」

私はそう言いながら台所をでて比企谷さんの隣に座るとそのまま彼に寄りかかる。

「ですから私は比企谷さんも頼って下さい、どうせなら2人で共用したいですから」

「……考えとく」

「ふふっわかりました……今はその言葉で満足しといてあげましょう」

私は目を細めてそう言う、何時もの作り笑いと違い今は自然と頬が緩む。

「八幡さん……」

「雛……」

「ねえ2人の世界に入るのはいいけど……小町がいるそばでは控えてくれない？」  
八幡さんの妹である小町さんの一言で私と八幡は我に帰った。恥ずかしいです。  
くオマケく

進路指導アンケート

総武高校1年

葉山<sup>はやま</sup> 雛《ヒナ》

あなたの信条を教えてください。

心から信頼出来る人以外は遠すぎ近すぎない距離感で接する事を心がける。

卒業アルバムで将来の夢は何で書きました？

適当にそれらしい事を書いてたので覚えてません。

将来のために今努力してることは？

私の1番嫌いな人の様な人間にならない事です。

先生からのコメント

その考えは社交性として社会で、それなりに役立つと思いますので、今後ものはげんで下さい。

ただ余計な心配かも知れませんが将来の夢については今は考えていますか？ 出来

るこならしつかりと将来については考えるべきでしょう。

それと嫌いな人とは誰の事でしょうか？ この内容だと誰かについてなのかわからないので、コメントがしづらいです。



# 私は彼を認めない

もう、疲れた

嘘つきの偽善者な私でいる事に

正直に言っつていいかな？

君には話して起きたいんだ

私の本当の気持ち

ある日、私は比企谷さんの家のソファで小町さんとお話をしていました。

するとチャイムがなり私と小町さんはお互いに首を傾げます。

その後、私は小町さんと共に玄関へと向かいました。

?????そこで私は目を覚ましました。

懐かしいですね??私が彼女と初めて出会った日、あの人の居るグループにいるため、たまにしかお話が出来ないのが難点ですが??。

あの後、お礼に来たと言っていた彼女からお菓子を受け取り、その後彼女が立ち去ろうとしたタイミングで、私は何故かこのまま彼女を立ち去らせたら行けない気がして、彼女を部屋に入れた後、比企谷さんと呼んだんですよね??。

私はそんな事を考えながら昨日の事もあり、気付けばケータイで彼女に久々に出掛けようともメールを送りました。

久々と言ってもつい数日前なのですけどね??。

そして、私は彼女の返信を見た後、一階に降りて朝食と比企谷さんと小町さん、そして私の分の弁当を作り丁度三人が集まった所で三人で朝食を食べると、比企谷さんに今日は彼女とお出かけするみなを伝え小町さんを見送った後、学校に向かいました。

ですが、この時のメールがきっかけでまさかあんな事になるとは、この時の私はまだ知る由もありませんでした。

放課後の事、私は比企谷さんのいる教室へと向かっていました。

本来なら私が嫌いなあの人がいる為、私としては行きたくないのですが??。

ですが何故、行きたくないのに向かっていているかと言いますと、私は今朝方にかけてメールで、下駄箱で友人の彼女を待っていたのですが、急に比企谷さんからメールが届き確認すると、どうやら彼女が私と会う事をグループの方々に伝えると、炎の女王様?とか言うグループのメンバーのリーダー的な人に、だったその子も加えて皆で遊ぼうかと言出し、彼女は遠回しながらもそれは無理と抵抗。

そしてそれがどうもその炎の女王様の癪に障ったらしく、現在問い詰められているとの事??。

比企谷さんもそれなりに抵抗はしたらしいが、どうも手に負えない相手らしく、やむを得ず私に連絡したと言った訳で、それを見た私は友人の危機への思いと、比企谷さんが私に頼ってくれたと言った事もあつて向かつている訳です。

「??(めん)」

「またそれ?」

私は教室の前まで来ると、教室からそんな話し声が聞こえた。

そんな中、私は、意を決して教室に突入する。

「ね、ユイー、どこ見てんの? あんたさあさつきから謝つてばかりだけど」

「そうですよ、謝る相手がまず違いますしね」

私は教室に入った後、そのまま一言私はそう言い放つ。

私の突然の一声に周囲の視線が私に集中する。

そんな中、私の友人、由比ヶ浜結衣がワタワタと私の元に駆け寄る。

「ご、ごめんね、ヒナリン」

「ええ??まあ、事情に付いてはとある情報先から入手してるので??謝ってくれたのでよしとしましょう」

私は、由比ヶ浜さんの謝罪にそう返事を返しました。

「ちよ、アーシ達まだ話が終わって無いんだけど!」

「話？　ですか？　一方的に攻め立ててた場面なら分かりますが??あれが会話だというなら私は小学校からやり直す事をおすすめするべきなのでしょうか？」

「——ッ！」

私はそう言つて笑顔で首を傾げて見せます。

そもそも、あんな威圧的に言つて由比ヶ浜さんがハキハキ喋るのは無理なのは彼女と関わつていればわかる話です。

何せ由比ヶ浜さんは、身体は色々と成長してるのに、精神年齢はそれに反比例してどこか幼い??。

分かりやすく言えば、見た目は大人で中身は小学校低学年と言つた感じでしょう??。

彼女の精神面の成長が止まるような環境、または出来事があつたのか、何かしらの精神的ショックの影響で幼児退行したのかは分かりませんが、とにかく由比ヶ浜さんには失礼かも知れませんが、精神年齢は小学校低学年の子と同様と私は判断しています。

故に、今のこの女王様の対応は、小学校低学年の子にしたら間違い無く同じ状態になってますし、最悪の場合泣く事でしょう。

「まあまあ、そう言わずに、優美子も悪気があつたわけじゃ無いんだしさ」

気が付くと私が嫌いなあの人が、私に向かつてそう言った。

「異議あり！　本人に悪気がなければ許されるなら、殺人や窃盗等を行った人が同じよ

うに悪気が無ければ無罪になりますか？ 違います。例え、悪気が有ろうと無かろうと罪は罪、犯罪を犯した結果は変わらないのです！ 故にこの場では彼女の悪気の有る無しは関係なく周囲から見た現状及び、由比ヶ浜さんの気持ちこそが重要なのであり、貴方の意見は全くの暴論でしかない！」

「——ッ!?!」

私はこの人が相変わらずなのを再確認すると、軽蔑も込めて睨み付ける。

そもそも、これが弁護士の子息だと言うのですから世も末です。

皆仲良くの考えなどで、弁護人の弁護など務まるはずが無い、悪意から目を逸らし続けて、弁護するに足る証拠が掴めますか？ いいえ掴めるはずが無いのです。

「ちよ、あんたさあ隼人に口出しとか何様だし！」

私にとにかくいちやもんを付けるように突つかかって来る女王様（笑）。

私はそんな女王様（笑）を鬱陶しげに睨み付ける。

彼女はそんな私に若干ビビッて少し後ずさりながら身構え、攻めてもの抵抗とばかりに私を睨み付ける。

とはいえ、こういった質問に対する返答は、既に葉山家のあの人が既に取り決めている。

それに、今は反撃する時期じゃない??。

今回に冠しては不服だが彼に塩を持って上げるとしよう。

そんな彼女を私はしばらく見詰めた後、呆れたようにため息を一つ吐き出した。

「ん？ 私の事が知りたいならその人に聞けばいいよ??何せ、その人と私は血が繋がってるんだから」

「——っ!?!」

私は手をヒラヒラ動かしながら最後に一言そう言う、兄とは口にしなかつたのは攻めてものの抵抗だ。

私は決してあの人を兄とは認めない。

今の私の家族は、比企谷家の人達であり葉山家では無いのだから。

そして、私は由比ヶ浜さんに帰るよと言うと、そのまま黙って教室を出ていくのだった。

私は彼女を少しは認めてあげようと思う。

誰かと違う事が怖くて

作った笑顔の下に潜ませた臆病な私

誰かと同じ事が嫌で

領きの奥に見え隠れしてる嫌気

孤独が怖くて被った仮面

どうしようもない嘘私つきを笑いなよ

どうしようもない偽善者私を笑つてよ

誰かこの偽善者を消して

私を消してよ！

「ごめんささい！」

私は目の前の光景が余りにも信じられず、思わず困惑してしまふ。

今日億劫になりながらも奉仕部に来た途端、雪ノ下雪乃が私に謝罪をして来たからだ。

「貴方に言われたあの後、貴方の言葉の真意に付いて考えてたの??それで、昨日は貴方が

休んでた事もあって?? 私なりに比企谷君にも貴方に付いて聞いてみたの?? ごめんなさい?? 私は貴方の思いに気付いて上げられ無かった」

雪ノ下さんは私に謝罪をしながらそう答えて来ました。

私は慌てて比企谷の方を見ます。

「?? まあ、アレだ?? こいつの真意を確かめ集った事もある、その?? 俺とお前の初めて関わるようになったあの時の事を話した?? それでもこいつの態度が悪いようなら、先生に抗議してでも辞めるつもりだったからな」

八幡さんは頭を描くとそのまま顔を逸らした。

遠回りで分かりにくく言ってはいるが、私の為に奉仕部の環境を少しでも変えようとしてくれたのだろう。

まあ、とは言えあの日の事か??。

あれは私が中学生の頃、私は中学生と言う思春期特有の精神不安定な時期と、家族に存在を否定され続け自分の心をすり減らし、完璧に摩耗しきった結果による鬱状態と重なり、私は遂に限界を迎えてしまったのだ。

その結果、私が起こした行動は、三階の教室の窓から飛び降り自殺を図る事だった。

私が死ぬ事で世間が騒ぎになれば、それにより自身の保身しか頭に無い両親にひとあわふかせられる。



ようするに私に出来る、少しでもあの人を私に振り向かせたかった。そして、少しでも後悔をして欲しかった。

だから私は飛び降りようとした。

だがそんな時だった。

突然、誰かが私の腕を掴んだのだ。

私はそれに驚いて振り向いた。

そして、そこにいたのは死んだ魚のように濁った瞳をした比企谷さんだった。

「——っ!?! は、離してー!」

私は必死で比企谷さんの手を振り払おうともがいた。

だけど、彼は私の手を決して離さなかった。

「ば、馬鹿か!?! 離して自殺されたら後々寝覚めが悪いっつーの!」

比企谷さんはそう叫んだ。

だが、もはや自分も世間も全てが私の敵のように見えていた私は、それでも必死に振りほどこうともがき叫んだ。

「私なんて知りもしない癖に! 家族から、元から存在しないものとして扱われた私の気持ち分かる! その上葉山家の為! 葉山家の為! て、人権すら束縛される!

皆は兄の妹としか見ようとしなない! 誰も雛としての私を見ない! 私には何も無い

の！ 居場所も生きる目的も希望すら私には無いの！ あるのは無価値な命と絶望だけの不幸な未来だけ！ そんな私から貴方は死ぬ自由さえ奪うって言うの!」

そして私はただ今まで抱えてきただろう思いを、ひたすら喚き散らすように爆発させた。

それでも彼は必死で私の手を話す事は無かった。

やがて、体力や気力も、私の方が早く尽き床に座りこんだ。

「ぜえ? はあ?? 知るかよ?? 俺はお前とは話すのも今回が初めてだし、それに俺はお前じゃ無いからな?? だから、俺はお前に分かるとかみてえな綺麗事は言う気はねえよ??」

比企谷さんはそう言うとその場の床に脱力して座り込みます。

それから、しばらくの間、沈黙が流れる中、私は完璧に何もかもがどうでもよくなっていたのでしよう、自暴自棄になって気付けば私は自分の事をポツリポツリと話していました。

「私は?? 欲しかったんです?? 私を完全に理解してくれる人が?? 分かってはいるんですよ、完全に理解して欲しい何て、とても傲慢で浅ましい願いだつて?? でも?? 私はそんな願望が許される関係が欲しかった??」

私はそんなふうには力の無い笑を浮かべながら言いました。

八幡さんは私のそんな話を黙って聞きます、そして腕を組んで暫くして組んだ腕を解

いて私を見ました。

「なあ?!お前の言いたい事は分かった。だかな?!どっちかってとお前は理解して分つてもらいたいんじゃないかって、分かって欲しいんじゃないかねえのか?」

比企谷さんは私にそう言った。私はその言葉が何だが私の中でストンと上手く入った感じがしました。

確かに、私は自分を完全に理解して欲しいと言う願望が無い理由では無い、ですが手が完璧に理解したとどうして分かるのでしょうか。

言葉でしょうか? いえ多分私は言葉だけでは納得何て出来はしない。いくら理解したと言われても私は、何か裏があるんじゃないか。何かしら事情があつてそう言ってるんじゃないのかと、勝手に考えるかもしれない。

だからこそ、私は相手を完璧に理解したいと言う願望を持っている事を相手に理解して欲しかった。

「ははっ?!?!確かに言われて見たらその通りですね?!ええ言い直します?!私は相手を完全に知りたいと思う願望を?!そんな自己満足を押しつけ合い、許容できる関係性が欲しかった?!」

私はそう言う少しだが、気持ちが多量晴れたのか、憑き物が落ちたように、少しばかり身体が軽くなったように感じた。

そんな中、比企谷さんは何故か恥ずかしげに頭を描いた。

「あ〜〜まあ何ていうの、一応今回の事もある、だから??あ、あれだ。こんなタイミングで言うのもアレかも知れないが??もし良けりやだが??」

そして私は、あの時の言葉を決して忘れる事は無いだろう??何故なら比企谷さんのあの言葉に確かに私は救われたのだから。

「俺と友達にならないか?」

あの後、比企谷さんと交流するようになり、そして小町さんの一件から私が比企谷さんの家に居候するようになって??そして晴れて比企谷さんと??。

「雪ノ下さん??正直言えば??私は貴方をまだ許す事は出来ません私の気持ち上それは直ぐには納得が出来ませんから??」

ならば、私はそんな比企谷さん思いを無下には出来ない??ですが、私は同時に自分の思いものせ、雪ノ下さんに向き合うとしましょう。

「ですが??出来る限りですが、私の心が??貴方への遺恨を??少しでも薄められるよう善処はしてみましよう」

「??ええ??それで構わないわ」

私は雪ノ下さんのその返事を聞くと、わずかばかり頬が緩んだ。

そして、その後はみんなして本日の部活動を開始するのだった。

まあ、今日も座って読書するだけでしたが??それでも以前と比べたら僅かばかり悪くは無かったです。